

Title	金融環境の変化と企業金融に関する一考察 - 株価形成と資本構成の観点から -
Sub Title	
Author	中谷俊信(Nakatani, Toshinobu) 太田康信
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1989
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1989年度経営学 第702号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0702

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 中 谷 俊 信
(鹿島建設株式会社)

主査 太 田 康 信
副査 関 谷 章

所属ゼミナール 太 田 康 信 研

鈴 木 貞 彦

金融環境の変化と企業金融に関する一考察 — 株価形成と資本構成の観点から —

わが国の企業金融はマクロ的にとらえると、経済成長・政府規制・金融政策等によってかなり大きな影響を受けてきた。

本研究では特に株式市場が企業金融に与える影響を問題意識として考察した。マクロ的な株高が個別企業レベルで資金調達にどういった影響を与えているか、また資本構成がどういった要因で説明されるかを中心に実証研究を行った。

特殊な金融環境下における資本型証券の発行要因を日経平均対象企業209社をサンプルとして検証した。その結果相対的な株価水準が資本型証券を発行する最も強い要因であることが実証され、企業経営者が資本コストを株価が高いほど低く実感していることがあきらかになった。また自己資本比率の低い企業が短期的にワラント債を利用して自己資本を上昇させていることや、株式保有の金融機関比率が高株価企業ほど高くなっていることも実証された。最後に、株価が資本構成にどういった影響を与えているかを、自己資本比率を被説明変数とする重回帰分析を行って解明した。その結果株価、EPS、営業リスクが自己資本比率を説明する有意な変数であることが検証された。

一部企業は営業リスクに対応し、自己資本比率を向上させる手段として、資本型証券を発行している枠組が明らかになった。わが国の株価が業績のみならず、ひろく企業資産価値全体を評価していることから、株価形成について経営者がより真剣に取り組まなければならない時代にきていることが示唆された。